

# 止まった刻

検証・大川小事故

第11部 未来をひらく

1/2

佐藤敏郎さん

## どうすれば 伝わるだろう

東日本大震災の津波で児童74人、教職員10人が犠牲になつた石巻市大川小。3月に閉校し、145年の歴史に幕を閉じたが、被災した校舎を訪れる人は今も後を絶たない。終章となる第11部は、大川小の校歌「未来をひらく」を文字通り体現する2人の言葉から、「あの日」を巡る過去、現在、未来を探る。(大川小事故取材班)

「大川小6年の次女みずほ てきたことが認めてもらえ  
さん」当時12歳を亡くした と。

佐藤敏郎さん(54)は4月26 判決が書いているのは、決  
日、初めて法廷に入った。大 して難しいことじゃない。「念  
川小津波訴訟の仙台高裁判 のためのギア」。津波が来る  
決。震災以前の防災対策の不 かもしれないから、念のため  
備を認めた判決を傍聴席で聞 に計画を立てる。大津波警報  
いた。自身は裁判の道を選ば が出たから、念のために逃げ  
なかったが、提訴から4年、 よう、ということ。子どもた  
児童23人の19家族が勝ち取っ ちの命を思えば、ギアは自然  
た結果に涙した。

7年たつて、ようやく「又 だと思ふ。  
スタートライン」が引かれた思 いれば救えた。そういう判決  
いだつた。大川小の出来事に、 だと思ふ。  
子どもに命を意味付けをした 地域の人が「大丈夫」と言  
い。原告の人たちも、参加し ったのだから仕方がない、と  
なかつた俺たちも一緒に訴え いう意見がある。住民には逃

ける人、残る人がいた。子ど 教員でもある佐藤さんは失望  
もは危ないと思つても動けな した。

い。判決が学校側に求めた地 7年間積み重ねてきた、約  
域住民よりはるかに高いレベ 340名に及ぶ判決文という  
ルの知識と経験」とは、学者 「スタートライン」が、簡単  
のような専門知識ではない。 に消されてしまった。市にも  
子どもを預かる学校と地域の 県にも伝わらなかつたのか。  
「念のためのギア」が同じで

いいはずがない。 別の判決に新たな会議や研  
津波が来た瞬間、先生たち 究、分厚いマニュアル作りを  
は悔しかつたと思ふ。絶対に 思い浮かべる人がいる。判決  
後悔したはず。約50分あつて はむしろ、形だけの会議やマ  
ほんの1分程度しか移動しな ニュアルは必要ない、と言っ  
かつたこと。そして3月11日 てるんじゃないか。思い浮か  
以前、あらかじめ準備してい べるべきは、子どもが走り回  
れば、と。そんな後悔にも判 り、笑顔が輝く学校の様子。  
決は向き合つてくれたと思 ければ、命が守られることが  
ふ。

「石巻市と宮城県は、判決 を不服として最高裁に上告し  
た。『学校現場に過大な義務 市の第三者検証委員会(20  
を課す』との上告理由に、元 13、14年)がまとめた「提

わが子が通つた大川小を案内する佐藤さん。あの日の「命」を  
伝える地道な取り組みが続く。5月27日、石巻市釜谷



大川小の津波事故 2011年3月11日午後2時46分、宮城県沖で起きたマグニチュード(M)9.0の東北地方太平洋沖地震による津波で、石巻市大川小(児童108人)の児童70人が死亡し、4人が今も行方不明。学校にいた教職員11人のうち、男性教務主任を除く10人も犠牲となった。当時校長は休暇で不在。学校は海拔1.1mで北上川河口から約3.7km離れ、市の津波ハザードマップで浸水予想区域外だった。地震発生から約50分後に第1波が到達し、最高水位は高さ約8.7mに達した。学校管理下での犠牲73人は戦後最悪とされ、児童23人の遺族が市と宮城県を提訴。仙台高裁は18年4月26日、事前防災について学校と教育委員会の組織的過失を認める初判断を示した。

かなかつたこと。命を救えなかつたこと。全て事実。山が命を守るわけじゃない。命を救うのは、山に登るといふ判断と行動。そこに向き合いたい。大丈夫だと思つても逃げる。なぜできなかったのか。最優先にしていたのは子ども命だつたのか。

「子どもが目の前にいても恥ずかしくないことを話そう。ずつと基準にしてきた。判決の重みや意義を、340名を読み解かない人にも端的な言葉で伝えたい。小中学生にも伝わるような言葉を見つけた。 3面に続く